

# Teaching Portfolio 2020



第 25 回佐賀大学・第 12 回福岡工業大学  
ティーチング・ポートフォリオ・作成ワークショップ  
2020 年 12 月 21 日（月）～23 日（水）

佐賀大学 地域学歴史文化研究センター  
伊藤 昭弘

itouaki@cc.saga-u.ac.jp

## 目次

1. 教育の責任	2
2. 教育の理念と目的	2
2.1 歴史研究の方法と資料の重要性を伝える	2
2.2 過去と現代のかかわりを伝える	3
3. 教育の方法	4
3.1 古文書・文献などの読み方や集め方を知る	4
3.2 一般的な歴史叙述と古文書から得られる情報との比較	4
3.3 具体的方法	5
4. 成果・評価	7
4.1 教育理念はどこまで伝えられたか	7
4.2 評価	7
5. 今後の目標	8
5.1 短期の目標	8
5.2 長期の目標	9

## 添付資料

- 1 オンラインシラバス
- 2 佐賀の歴史文化Ⅳ授業資料
- 3 佐賀の歴史文化Ⅳ古文書解読教材（原資料画像、解読文、返読回答）  
原資料画像は佐賀大学附属図書館所蔵小城鍋島文庫より。
- 4 佐賀の歴史文化Ⅳ授業資料
- 5 日本史特別講義Ⅱテキスト
- 6 佐賀の歴史文化Ⅳレポート
- 7 佐賀の歴史文化Ⅳレポート
- 8 地域史論Ⅰレポート
- 9 佐賀の歴史文化Ⅳレポート

表紙画像：佐賀県立図書館所蔵「佐賀藩地図（複製）」。

## 1. 教育の責任

私は現在佐賀大学地域学歴史文化研究センターに属し、佐賀地域の歴史文化の研究成果を学生教育や地域社会に還元することを職務としている。当センターには所属する学生・院生はいないため、教養教育および他学部において、以下の授業を開講している（※添付資料1）。

科目名	対象学生 受講者数	種別 期間	開講年度	概要
佐賀の歴史文化Ⅳ (教養教育)	学部3,4年 約50人	教養 講義	2018年度より 毎年	江戸時代の佐賀について、古文書や古地図などを用いて地域的特質をさぐる。
地域史論Ⅰ (芸術・地域デザイン学部)	学部2～4年 10～30人	専門 講義	2018年度より 毎年	日本近世における地域史について、佐賀などさまざまな地域の歴史資料をもとに、分析方法を学ぶ。
日本史特別講義Ⅱ (教育学部)	学部3,4年 約30人	専門 講義	2019年度より 隔年	江戸時代の人びとが書いた書物や藩の政治にかんする古文書などを実際によみ、理解を深める。

「佐賀の歴史文化Ⅳ」は、教養教育インターフェースコース「佐賀の歴史文化」を構成する授業であり、江戸時代の佐賀にかんする理解向上をめざしている。「地域史論Ⅰ」は、古文書など文化財から地域の情報を獲得する方法を学んでもらう。「日本史特別講義Ⅱ」は、小中学校・高等学校の教員として、古文書など過去の人々が実際に記したものの、作ったものを教材として活用できるような知識を身につけてもらえるようつとめている。

## 2. 教育の理念と目的

### 2.1 歴史研究の方法と資料の重要性を伝える。

#### ○理念

歴史／日本史について、受講生の多くは高等学校までの体験をもとに、おおまかな歴史の流れをつかむ必要を感じている場合もあるだろうが、たいていは暗記科目というイメージを抱いているように思う。また日本史研究がどのような手法によって行われているか、ほとんどの受講生は知らないだろう。

歴史研究は、古文書など資料のなかから有効な証拠をいくつも探し出し、それらを結び付けてストーリーを編み出す作業だと私は考えている。たとえば佐賀県では幕末佐賀藩が顕彰され、歴史研究の成果を吸収しつつ、県民が佐賀藩を誇りに思えるようなストーリーが構築されている。しかしそのストーリーには、歴史研究の手法に基づいた裏付けがあるものと、伝承やフィクションが入り混じり、はっきりとした裏付けを持たないものがないまぜになっている。私は歴史研究の手法は検察・警察が犯罪を

立証するときの過程と似ていると考えている。膨大な資料を集めてそのなかから証拠となるものをいくつも探し出し、事件の全貌を明らかにする。もし犯罪立証の場で、証拠とされたものが実はあやふやなもの（証拠として成立しがたい）だったらどうなるだろう。裁判で厳しく追及されるだろうし、追及を何とか退けてしまったら、えん罪を生み出すかもしれない。上記の幕末佐賀藩研究にたとえると、だれが言い出したのかわからない噂話や、被疑者をおとしめたい人びとの主張にもとづいて、有罪の結論を出すようなものだろうか。

歴史研究では、なにより一次資料（その当時、当事者が記した記録など）の分析がもっとも大切である。伝聞資料や後年の編纂資料（編纂者の意図がこもった資料）は、どうしても一次資料に比べ信頼性が劣っている。現代の私たちにあてはめると、日々入手するさまざまな情報について、きちんとした「ソース」が存在し、信頼しうるものか選別する行為と共通している。現代社会において欠かせないスキルであり、歴史研究を題材に、情報の信頼性を考える大事さを、より認識してもらいたい。

#### ○目的

私が研究している江戸時代になると、一次資料は山のように残っている。その山に入り込み、自分の研究テーマについて新たな事実や論を導き出せるような資料を発見する。すでに知られている一次資料でも、新たな観点で読み直したり、それが書かれた背景を洗いなおしてみたり、他の資料と組み合わせると、今までの研究とは違う解釈を導きだせることがある。一次資料が限られている古代・中世史研究は、こちらに重点がおかれる。このように歴史研究には、一次資料の発見・分析により新しい見解を考え出すという面白さがあることを伝え、さらには「理念」で記した「情報の信頼性を考える」意欲をうながす手助けとしたい。

## 2.2 過去と現代のかかわりを伝える。

#### ○理念

現在のさまざまなものごとは、過去・歴史の幾層もの積み重ねのもとに存在している。それは国のあり方とか大きな話だけでなく、今自分が住まい、生活している地域・空間がどうやって成り立ったのか、そもそも自分はなぜこの世に生を得たのか、という小さな社会・個人についても、それぞれの歴史ストーリーが存在する。過去を身近に感じることで、現代とのつながりを意識してもらいたい。

そして、現在のものごとに課題や難点があるとすれば、それが生まれた理由は過去・歴史のなかに存在する。そのことを実感できれば、現在も未来からみると過去／歴史の一部であること、自分たちの行動が未来に影響することを自覚してもらえると考えている。さらには、過去／現在の事象を伝えるモノを、社会全体で保存・共有していくことの重要性を認識してもらいたい。

## ○目的

私が専門とする江戸時代においては、現代の経済活動や地域社会のあり方のルーツになるようなものごとを多数見出すことができる。たとえば大坂の堂島米市場は、日本における証券市場の始まりといわれている。また現在の佐賀県は、地域ごとの多様な個性が大きな魅力だと私は考えているが、それは江戸時代の「藩」の配置や、佐賀藩内での重臣たちの所領配置とつながっている。

このように、現代の地域を考えるための情報や、江戸時代から現代までの地域の変化などを一次資料から読み取ることで、過去から現代までの連続性を受講生に理解してもらおう。

## 3. 教育の方法

### 3.1 古文書・文献などの読み方や集め方を知る。

一次資料を読む大切さを知ってもらうため、どの授業でも過去の人びとが記した古文書・文献を受講生に読んでもらい、そこからどのような情報が得られるか知ってもらう。そのさい、すでに解読・活字化されたものではなく、できるだけ現物の古文書・文献のコピーを配布し、過去の人びとが書いた「くずし字」の解読に挑戦させ、一次資料と向き合うことを実体験してもらう。

また近年、多くの図書館や資料館などで古文書などのデータベースが作成・公開されており、研究テーマによってはウェブ上だけで資料を収集できることもある。私自身も佐賀大学所蔵の古文書（小城鍋島文庫）を用いた「小城藩日記データベース」(<https://crch.dl.saga-u.ac.jp/nikki/>)というデータベースの開発・運営に携わっている。こうしたデータベースが、過去と現代のつながりを知るためのツールとして活用できることを知ってもらう。

### 3.2 一般的な歴史叙述と古文書から得られる情報との比較

日本史全般や地域の歴史において、通説として一般的に叙述されていることについて、古文書から得られる情報と対比する。たとえば「教育の理念」で紹介したように、幕末佐賀藩を顕彰するために作られたストーリーには、きちんと古文書の裏付けがあることもあれば、何を根拠にしているのかはつきりしないまま事実として扱われたり、最初は推論として書かれたことが、「孫引き」を繰り返すことにより、いつのまにか事実とされていることがある。そこでこうした「通説」を古文書から得られる情報と比較し、あくまで裏付けに基づいた情報をもとに歴史像を再構築する必要性を提示する。

### 3.3 具体的方法

各授業、基本的には1) テキストへの取り組み(解説・読み下しなど)⇒2)パワーポイントを用いて1)の解答提示と説明、およびテキスト内容の解説、というサイクルをとっている。今年度はオンライン授業となり、方法を模索した結果2)はパワーポイント資料をもとに動画を作成し(計40~50分)、受講生に視聴させた。また課題はその都度提出させ、レポートなどにはフィードバックを実施した。具体的な方法は以下の通りである。

#### 1) 一次資料の大切さを伝える。

各授業では、まず一般的に語られている「通説」と古文書から得られる情報の違いを比較し、裏付けのない「通説」があることを知ってもらう。その事例として、私はどの授業でも、佐賀藩主鍋島直正にかんするエピソードなどを紹介している。直正は、天保元年(1830)17歳で藩主の座に就いた。江戸で生まれた直正は、藩主に就いたのち初めて佐賀に帰国することになったが、その旅の初日のスケジュールが大幅に狂った。その理由は、佐賀藩の江戸藩邸に商人たちが押し寄せ、直正に随行するはずの家臣たちに「ツケ」の支払いを求めて居座ったためだった。それを聞いた直正は涙し、藩政改革、特に藩財政の立て直しを決意したという(<https://nabeshimanaomasa.com/>の試し読みに、このエピソードが載っている)。幕末の名藩主として有名な直正は、劇的な藩主生活のスタートを切ったことになる。しかしこのエピソードは、一次資料はおろか後年作成された二次資料においても、根拠を見出すことができない(ちなみに私は類似したエピソードが記された一次資料を発見したが、それは文政8年(1825)のものだった)。

一方、この旅の一次資料である直正側近の記録をみると、初日の旅はまったく滞りなく進み、初日の宿泊地川崎に到着していた。上記のエピソードとは、まったく正反対のことが記されているのである(※添付資料2)。厳密に言えば一次資料がない=事実ではないとは100%断言はできないが、根拠がない話と一次資料に記された内容とどちらに真実味があるか、受講生に考えさせている。

#### 2) 一次資料の扱い方を伝える。

一次資料である古文書から情報を得ることを経験してもらうために、古文書・文献を実際に読んでもらう(※添付資料3)。教養教育ではあくまで古文書に触れてもらうことに重点を置くが、芸術・地域デザイン学部および教育学部の授業では、くずし字解説・読み下しや内容理解についても習得を求める。

教養教育および芸術・地域デザイン学部の授業では、古文書から得られた情報をもとに地域(佐賀)の歴史的特質を説明する。たとえば前述した現代の佐賀県内の地域ごとの多様性は、江戸時代佐賀藩が「地方知行制」(家臣たちが与えられた領地を直接支配するシステム。ほかには領地を支配することはなく、領地高に応じた給与を米

で支給される「蔵米知行制」がある)を採用したことに一因がある(※添付資料4)。このように、現代の地域の特質について、そのルーツにかかわる情報を古文書から導き出す。

教育学部の授業においては、教科書に書かれている内容を批判的に読み直すことができる古文書・文献を紹介している。具体的には、教科書にも書かれている諸藩の財政難について、逆の見解(豊かな藩がある程度存在)を示した江戸時代の商人の著作を用いた(※添付資料5)。これは受講生が教員になったのち、教科書の内容を単なる暗記事項としてではなく、当時の人びとのさまざまな視点の一部を切り取ったものとして生徒に紹介し、ものごとを多面的にみる必要性を教えるための素材として使ってもらいたいためである。

### 3) ウェブを活用する。

歴史情報を収集するための手段として、さまざまなデータベースを実際に利用してもらう。具体的には、東京・京都・奈良・九州国立博物館の所蔵品を紹介する colbase (<https://colbase.nich.go.jp/>) や 佐賀県立図書館データベース (<https://www.sagalibdb.jp/>) で佐賀県の文化財・古文書を検索・調査し、レポートを課した(※添付資料6)。たとえば佐賀県立図書館データベースでは、各自が関心をもつ事項や地域にかかわる古文書・古地図をさがしてもらう。古地図や戦後の航空写真なども利用して、江戸時代から現代までの地域の変化を調べた(※添付資料7)。また小城藩日記データベースでは、感染症にかんするキーワードにより記事検索を行い、江戸時代の感染症対策について調べ、現代との比較を行ってもらう(※添付資料8)。

### 4) フィールドワーク

現在のオンライン授業が中心となっている状況では実施が難しいが、フィールドワークも行っている。本来なら授業時間中に私が受講生を引率し、説明しながら佐賀の城下町を歩きたいところだが、一度実施した結果、受講生が10人を超えると難しいと判断し、以降は受講生に、古地図から想起される江戸時代の様子と現在を比較し、レポートを提出してもらう。佐賀大学本庄キャンパス北側の精町にかんする古地図、よび江戸時代の土地台帳に基づく地図を配布し、実際に歩いてみることで江戸時代から残っている寺社・道・水路にきづいてもらい、江戸時代と現代のつながりを実感させる。

(左：佐賀県立図書館所蔵「本庄西分村絵図」、右：公益財団法人鍋島報効会編集・発行『明和八年佐賀城下屋鋪御帳扣（屋敷御帳控）』（2012年）より）



#### 4. 成果・評価

##### 4.1 教育理念はどこまで伝えられたか

###### 1) 歴史研究の手法、一次資料の重要性

「通説」と一次資料の情報を比較することにより、歴史研究の手法を伝えることはできていると思われる。しかしながら、一次資料から情報を得ることの「面白さ」までは、まだ十分に伝えられていないようだ。ただ 2014 年度を受講生のひとりが、私の授業を受けたことをきっかけに、出身地の江戸時代にかんするテーマを卒業論文としたことがあった（文化教育学部）。原典（くずし字で書かれたもの）ではなく活字化されたものではあるが、一次資料から情報を得て、自分なりに故郷の歴史を描き出そうと試みた。授業において、歴史研究の「面白さ」を伝えた成果としてあげておきたい。

###### 2) 過去と現代のかかわりについて

古地図・航空写真を用いた地域の変化やフィールドワークにかんするレポートには、たとえば「昔と現代の地図を見比べたが非常に面白かった。現代まで残るもの、残らないものがあり、現代社会も過去からの延長線上で成り立っていることがわかった。今後も機会があれば古地図を読み解いてみたい」といったコメントが寄せられ（※添付資料9）、私が受講生に感じてもらいたかった過去と現在のつながりを理解してもらえたようだ。

## 4.2 評価

「地域史論Ⅰ」の学生授業評価アンケートについて、いくつかの項目について結果をあげる（2017・2018年度は受講生数・アンケート回答数が少なかったため除外した）。

項目	年度	5	4	3	2	1
教員の教育理念に基づいた教育方法や成績評価方法等の説明は有益でしたか。	2020	21%	79%	0%	0%	0%
	2019	0%	88%	13%	0%	0%
担当教員は、あなたの質問や相談に適切に対応してくれましたか。	2020	71%	29%	0%	0%	0%
	2019	29%	43%	29%	0%	0%
教員の授業に対する意欲や熱意が感じられましたか。	2020	86%	14%	0%	0%	0%
	2019	0%	100%	0%	0%	0%
この授業の学習到達目標を達成できましたか。	2020	14%	71%	14%	0%	0%
	2019	0%	88%	13%	0%	0%
教材（教科書、配布資料）やICT環境（LiveCampus、講義配信システム、各授業の講義用Webページ、ネット授業、eラーニングなど）は授業の理解に役立ちましたか。	2020	43%	50%	7%	0%	0%
	2019	22%	67%	0%	0%	11%
この授業は全体として満足できるものでしたか。	2020	50%	50%	0%	0%	0%
	2019	11%	78%	11%	0%	0%

2019年・2020年度ともおおむね高い評価を得ているが、全項目で共通しているのは、2019年度は5段階中「4」の評価が多いのに対し、2020年度は「5」が多くなっている。この理由は、オンライン授業の導入による私の意識変化が大きいと推察する。昨年度までは、受講生への課題について適切な量を測りかねていたが、今年度オンライン授業となり、出席状況や受講態度などを正確に把握するのは難しいと感じたため、毎回授業中に課題に取り組んでもらい、さらに宿題を課すことも多かった。そのことが、授業への意欲・熱意、配布資料への評価につながったと考える。また課題が増えたことにより受講生からの質問への対応や提出された課題へのフィードバックの機会が増え、丁寧にかたえたことが数字にあらわれたようだ。

しかしながら、到達目標への達成感はまだ十分に感じさせることができていない。やはりくずし字の解説・古文書の読み下しの習熟には時間がかかるため、より丁寧な指導が必要である。

## 5. 今後の目標

### 5.1 短期の目標

## ①授業内容の向上

授業内容を向上させるため、以下のように目標を提示したい。

- ・教養教育・・・江戸時代の古文書に頻出する文字および返読文字の習得。
- ・芸術・地域デザイン学部・・・上記に加え、いくつかの難読文字（古文書に出ることが多く、かつ特殊な「くずし」であることを知らないと読めない）・返読文字（出ることが比較的少ないもの）の習得。
- ・教育学部・・・返読文字の習得に重点を置き、読み下し文が作成できるようにする（古文書・文献を教材として用いるさい、わかりやすく生徒に伝えるため）。

そのうえで、教養教育では江戸時代佐賀の歴史的特質、芸術・地域デザイン学部では古文書から地域の特質をさぐる手法、教育学部では古文書・文献を教材として使うための知識を学ばせる。各授業とも学生授業評価アンケートの学習目標到達にかんする質問について、「5」の回答を全体の50%まで上げることを目標としたい。

## ②佐賀の近代史を教える手法の検討

私の教育の目的を達成するために、自身の専門である江戸時代だけでなく、他の時代、とりわけ現代と接近する近代（明治以降）を授業のテーマにすることを考えてみたい。佐賀県には明治以来の公文書が豊富に残っているほか、国立公文書館のデジタルアーカイブでは政府の公文書が大量に公開されており、これらの資料を活用することにより、授業の幅を広げたい。

## 5.2 長期的目標

私が所属する地域学歴史文化研究センターは、他部局で開講する授業を通してしか、学生・院生に接することができない。教育理念を実現していくために、より学生・院生に対して密接な指導ができるような仕組みづくりを、他部局と連携してすすめていきたい。

そして、その仕組みのもと地域の歴史に興味をいだき、佐賀や自分の故郷の歴史について、一次資料を用いた歴史研究をやってみたいと学生が思うような授業を行い、こうしたテーマで卒業論文を執筆したり、卒業後の進路に研究者・学芸員や文化財保護関係の仕事を選択するような学生を多く出したい。さらに大学院で歴史研究を志す人が現れば、積極的に指導したい。